

魔女兵器 † 希望の光

天流

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔女兵器のAnother Storyです。駄文かつご都合主義ですが見てくれる方がいたら頑張ります・・・どんなに文才がなかりうと魂をこめるのみです・・・レ
ンちゃんカワ（・▽・）イイ!!

目次

Part 1. 『異質物』と始まり

1

Part 2. 再開 | 11

Part 3. 虚幻不実の真相

18

Part 1. 『異質物』と始まり

??? 『異質物』???

超常現象を引き起こす情報、ーまたは媒介。

それは人類が与り知らぬ原理の集合体であり、人々の生活に多大な影響をもたらした。

この力は科学の既存解釈を崩壊させ、新時代へと導いたのは言うまでもない。

力は火種となり、七年戦争とも呼ばれる大戦へと発展する原因にもなった。

故に人々は神の力だと恐れ崇め、それはいつしか『聖痕』と敬称されるようになる。

『聖痕』の中でも最も強力と考えられたーーーXK級『異質物』

異質物研究技術の進歩によりこれらは人類の計り知れぬ脅威と認知され、のちに六大国家と呼ばれる勢力が持つ、それぞれの切り札として扱われた。

結果、絶大な力は抑止力となり、皮肉にも六大国家間での平和条約の締結に至る。

以降、各国は戦火の拡大を防ぐため、講究に重きを置く方針を発表。

それぞれの首都は『Academy City学園都市』へと改名される。

表面の安定化を図りつつ、水面下では世界全体の技術研究をさらなる躍進へと向かわ

せた。

——時代は進み、とある推論が注目される。

特定の媒介の影響下では異質物が個体と共鳴し、異質物の超常現象を意のままに扱えるというものだ。現象において、最も広く知れ渡った個体——『魔女』

貴方は知っているだろうか？

『魔女』の神秘なる力の根源となる異質物を——

貴方は知っているだろうか？

その昔『魔導器』と呼ばれていた事を——

l p i p i ♪

『ログイン処理を正常に完了致しました』

ID : x x x x f 4 6 4 9

名前：御守みかみ 咲耶さくや

年齢：21歳

性別：男性

ようこそステイ——』

「……やってしまったかねえ」

電子音声の認証音を聞きながら、グレーのパーカーをきたボサボサ髪の茶髪の青年、咲耶はぼりぼりと頬を掻いた。

現在咲耶が居る場所は第五学園都市のステイールマウント研究センターという異質物の収容及び研究を行う、新豊州境界内最大の施設である。

無事認証を終えた咲耶は施設内へと足を進め、ぼんやりと思った。

(人があんまりいないな・・・)

閑散とした空気、消毒液のような匂いが空气中に漂い、清掃後を咲耶に思わせる。

そもそも咲耶がきたのは大学の単位のためである。大学生になってから一人暮らしを始め、生活費が足りないのでスーパーのアルバイトを始めたのだが：

学問との両立が難しく、気づけば生活バランスが傾いてしまったのだ。

なので単位獲得の為に有名科学者の講習補助、物運びとか程度に参加したのだが

(こういう時に限ってオバちゃん急用はいるんだもんなあ：)

咲耶は軽いため息をはいて、いつも陽気に笑うオバちゃんの顔を思い浮かべた。普段は時間と言うと上がりなのだが、パートのオバちゃんが急用ができたとかで欠勤となったのだ。

別に残業する必要がないのだがお世話になってるからと引き受け、結果遅刻である。つまり御守 咲耶は俗にいうお人好しであった。

そんな中ふと、ふと何気なく周りを睨めは見まわしたのだ

相変わらず閑散としていて、人一人つ子いない…まるで自分から隔離されたかのようだ

——なんて詩人なことを思い浮かべず、違和感を思い浮かべた

(…何かおかしいぞ？ 確か今日は学園開放日で他の学園都市の視察団だけでなく市民にも開放される。まあ、だから俺みたいな学生も来ているわけだけど…

今回は異質物の研究という名目だけど勤勉な学生も…)

来ない日もあるかと結論付けようとしたとき、思考が回転してきた睨めは悪寒を感じた

(待て…急いでととりあえず2階にきたわけだが俺はどうやってきた…確か、たまたま空いていた貨物用エレベーターだ

じゃあ警備員は？ 普通一般人が貨物使うとか許可しないだろ…

そもそも何故俺は貨物用エレベーターを使った!?)

スツと睨めは目を細め、静かに辺りを警戒しながら異常なことに気づく。

ロビーのエレベーターが使えないことに気づいたのだ、故障ならそれこそ、警備員の案内があるはずだろうと思いきや睨めは手すり側によりふと声が聞こえたことに気づき、そつと物陰からのぞき込む。

(…う…………なっ!?)

目の前で起きた光景に咲耶は目を見開くしかなかった、バットを握りしめた少年がニュースのテロで見える覆面男に殴りかかったところ腹部を蹴られ、返り討ちにされた拳銃が手すりから壊れ下の階へ転げ落ちたのだ。

銃を背負ったテロリスト、以下覆面Aの出現と少年の安否に咲耶は混乱をするが相手が手すりから転げていった少年を探しているのを視認すると。地を這うように駆け出した。

(ええい、儘よ!)

「…あのガキぶつころ…ッ!？」

足音に気づき、覆面Aは振り返るが咲耶にとっては好都合で、素早く懐に潜り込む。

「疾ッッ!」

「かはっ!？」

間合いを完全にとらえた刹那、咲耶は覆面Aに深々と鳩尾に拳を叩き込み、地に沈める

「とらえ「おい!?!何があつた!!」ッチイ!？」

廊下の見張りを一人ではしていないだろうと予想はしていたとはいえ、早期の遭遇に

舌打ちをした咲耶は再び獣のように地を低く駆け、覆面Bにも襲撃にかかる

「ツ！over!!こちらブラb」

「させるかツ!!よっ!!」

すぐさま増援を呼ぼうとする覆面Bに咲耶は身に着けていたシヨルダーバッグをしながらのように投げつけるが覆面Bも真正面のため叩き落した

「ツover!!o……ッ!?!」

「ふッ!!」

しかし対処されるのを想定済みで下から抉りこむような蹴り上げで咲耶は相手の無線を蹴り飛ばし、その事態に気づいた覆面Bは激昂し、背負っていた銃を構えようとした。

ただ相手が事態を認識するまでの時間を許す気はなく

「キサッ「遅つつせええ!!」……ッツア!!?!」

吼えるように咲耶は軸足をバネに宙に跳ねると上段蹴りした足を鎌のように脳天に振り下ろした、踵落としー上段蹴りという態勢と軸足の隙が出来やすい大技をしつかり決めた咲耶は危なげなく着地すると、静かに残心をとる

呼吸を整える。

「…流石に緊張したな、とりあえず少年の安否を確かめにいかないともまずいか」

咲耶が胸に手を当てて安堵するように深く息を吐き、向かおうとしたときだ

——パシユツ

「……あ？」

なんだ？この違和感は？

咲耶は自分に襲う変な感覚に戸惑いながら視認をした

——胸に当てた手からこぼれる様に出る真っ赤な液体を

振り向く。咲耶は視認をした

——覆面らしき男がサイレンサーらしき銃を構えているのを

ああ

ああ

(そうか……俺はやらかしたのか)

完全に。無防備に、無様に、敵の増援は成功していて駆け付けた増援に発砲されたのか

少年を助けるつもりだった、やれたと思っていた

(痛エナ、…クソツタレ)

敵に向けてだけでなく失態を犯した自分を自嘲するように嗤うと、少年と同じように下の階へと落ちていくのだった・・・

(…………ツ……あ、れ……何してたんだ?)

数刻の経過、奇跡的というべきか、人外ともいえる生命力で咲耶は意識を取り戻した、まるで言うことを聞かない体に億劫さを感じながらも

咲耶は霞む目を開け、その光景を見た——見てしまった

真つ赤だった、燃えるような熱気、周りは火の海で施設内だったはずなのに外になっ
ていた。

硫黄のような刺激臭が臭い、彫刻のようなものを見た

(ニン……ゲン?なんだ……これ……?)

出来の悪い悪夢を見ているかのようだ、襲ってきた覆面らしきやつもいた・恐怖に怯

こんなところで

そんな言葉が胸中に浮かぶ、指に、身体に力はないのに

声は出ないのに

(こんなところで死んでたまるかああああアアア!!?)

声は出ないかもしれない、けど天を貫けと云わんばかりの咆哮にかすかにナニカが聞こえ、咲耶の意識は暗転した

??? 願い授かりました、x x x x x の名、契約履行を致しますか???

—その日、世界は滅亡した・・・

Part 2. 再開

ーチュン、……チュンチュン♪

今日も心地の良い小鳥の囀りと共に目覚める

(……なわけ、ねーよ!?……あ?)

目を覚ました咲耶は早々に自分ツツコミをしながらバツと辺りを見渡す

ー机、主に学問の為。後は家計簿とかにも使ってる

ー本棚、結構趣味で色々漁っているが、武術やサバイバル系の本も買い揃えている…

整理整頓だつてしているから綺麗だ。

ー時計、日課の早朝トレーニングで6時には起きている

1LDKの安い賃貸アパート、ポロつちいけど過ごし慣れてきた自室だった。

「夢……だつて、いうのか?」

……軽く額に手を当てながら、咲耶は悩むように視線を下げる

そこにあるのは僅かに膨らんだ胸

(What?)

思わず英語になるほど、咲耶はもう一度見る

そこにあるのは僅かに起伏のある胸である

「そうか胸かー、バストレボリユーションっていうし、常に鍛えてたから大胸筋くんが盛り上がってツツなわけねーよ!!?」

本日2度目の自分ツツコミである、咲耶はゴクリと喉を鳴らし恐る恐る手でそれに触れる。

ぷによん♪

「……………んっ……………」

ぷによん♪

何度触ろうと柔らかい感触、そして何処からか聞こえた低めの……………しかし艶のある声「はっ、ははは……………まさかあ……………」

ギギギと首をロボットのようにながら動かしながら鏡で真実の姿を……!!

ーバツサリと伸びた茶髪、猫のように鋭い細目、唇には艶があり

小さなお山が二つ

「……………なんでさ……………」

某主人公の気持ちってこんな感じ?

そう思いながら暫し呆然とする咲耶ちゃん♀(21歳)の朝である

ー第2話　マジカル★咲耶ちゃんスターはじまりま（ねーっよっ!!?)

色々取り乱したが、成り行きに任せるようで、冷静沈着である咲耶は既に卓袱台に両手を組み、顔を置くというあのスタイルで落ち着いていた

「相棒……………どうして先に逝っちまったんだよAIBOoooooooo!!?」（泣）」

訂正、絶賛悲痛の声をあげて泣いていた。

流石に生まれてきてからの存在の喪失はデカイようである。

ああ、クソと言いながらポリポリと咲耶は頬を搔くと、携帯に視線を移す

「……………日付が戻ってやがる。正直女になったのも信じられないが、時間逆行とかどこ
のSFだよ」

夢で片付けるのは簡単だ、でもそれは知るべき真実から遠ざかる道じゃないだろうか
?

これもありアルすぎる夢かもしれない、明日には日常に元通りかもしれない
しかし、あの大災害が起こりうるとしたらー

ーこの女性の体になったことに意味があるのなら……

「あんな大事件起きてニユースにならないわけないが、日付戻っているんじゃないか」

咲耶は適当にスマホをスクロールしながら、政治や世界的ニユースなどから取捨選択

して行く。

「……………いつは？」

???

『ロスゴールド』盗まれる!?

昨夜、12組の監視装置が見張っている設置場所から消えた。

ステイルマウント収容研究センターは、厳しい管理や警備を持っており、盗難の可能性は極めて低いとされる……

「……………ロスゴールド、そういうや俺が手伝う講師の内容もこれだったな

そして研究センターか……まあ、今確認できる情報はこれぐらいだし

研究センターの様子を見に行くか」

姿見を見ながら咲耶は服装のチェックをすると、あることに気がついた。

「……………おい」

やはり女性となった為、身体の構造や身長なども変わっていると思つたがなんと大きくなっていたのだ……

前の身長が大体160cmで平均男性より下というコンプレックスを抱いていたが170cm越えの胸以外はウエストも締まったモデル体型である。

青無地のVネックに黒のレザージャケットを羽織ると、身長の変化によりヘソ出しスタイルという意識高い系服装になってしまった、下はいつもの青のジーンズだが見た目のせいでイメージアップした感じもある。

「……前がボサボサのモブメンだっただけにビックリすぎだな……まあ、目付きの悪さは変わらないみたいだし、そこはなんとなく落ち着くけどさ」

手慣れたように銀のリングと首にチョーカーをつけると、適当なゴムで髪をポニーテールに纏める

「一般女子の服装は知らんが、まあ……変じゃないだろう。」

さて、行きますか」

然程女になったとかのシヨックを忘れ、普段通り、むしろ身長が伸びた事が嬉しいのかウキ気味でバイクのキーを差すのだった。

ーバイクを飛ばして30分ほど、研究センターから少し離れた場所にバイクを止めて、目的の研究センター手前で立ち止まった

「さて……来たのはいいけどどうするかな？」

やっぱり厳戒態勢にはいつてるわけだが………おや？………あの子は」

遠目から見ていた咲耶は配置についていた警備員に追い返される少女を見るとすぐ

さま接近していった……

——

「うゝ、手がかりあるはずなのに悔しいなあ」

黒髪に赤い房が混じる特徴的な髪の少女はうゝ！うゝ！と唸りながらバットを引きずって移動していた

完全不審者である、そんな中向かい側から、女性のテノール側の低い声で少女に呼びかけてくるものがいた——咲耶である

「……お嬢ちゃん、いや……少年かな？少し話いいかな」

「ツ！な、なんで俺のこと男って！？あんたいった……いやお姉さんは！？」

咲耶は警戒するどころか、詰め寄ってくる少女に驚きながらも

静止のポーズを取り、落ち着くように少女を諭した。

「……もう少し警戒心持った方がいいと思うが？」

まあ、こつちも好都合。……あそこの喫茶店で話さないか？

「確認したい事が私にもあるんだ」

「うあ！……ちよつと待ってくださいよ！」

クイツと指で喫茶店を指し、歩き出す咲耶に慌てて少女もバットを持ってついていく

—こうして世界が変わって、再び運命（2人）は交差する

Part. 3

虚幻不実の真相

女性に案内された喫茶店は小綺麗で、空調も聞いていて快適な場所であった

「……………あのお……………」

「……………」

バットを持った黒髪の美少女、坂井^{さかい} 蓮^{れん}は目の前の目を閉じた女性の沈黙にソーッと声をかけた。

正直混乱気味である、朝目覚めると女の子になっていて、夢の中で戦闘したかといえ
ば微妙だが、例の青バットが枕元近くに立て掛けられていたのだ。

しかし、手掛かりのありそうな研究所は気前のいい警備員のおじさんに帰される始
末、途方にくれて帰ろうとしたところ

(この人、何で俺が男だとわかったんだ?)

一目で看破してきた女性に蓮は疑問を抱きつつも、女性の奢りと言われてから注文し
たオレンジジュースをチューつとストローで吸う。

控えめにいっても、…てか可愛いんだろ。

男としては嬉しくないけど、少なくとも今は女の子のはずでバレるわけないのにと蓮

は思いながらも、そつと女性の外観を観察する

(それにしても、この人モデルみたいにカッコいいよな……まつげ長いし、眼は鋭かったけどエメラルドグリーンの瞳で凄い綺麗だったし、皮ジャンのヘソ出しとか……)

なんていうかアクション映画の主役級にできそうな……意外とそうだったりして) 適当に女性の正体を連想しながらも答えは出そうになかった。

でも、尚更声を掛けられる理由が分からない。と蓮が諦めてうへえーと机に突っ伏しそうな所、件の女性ー咲耶は眼をスツと開いた。

「ーすまないな、私も考えを纏めるのに必要だった」

「あつ!?!はい!?!………考えですか?」

「ああ、………私としても何処から話せばいいか分からんが……」

咲耶は顎に手を当て思考をすると、再び蓮へと視線を戻した。

「そうだな、私が君を少年だと思った理由ーあの時私も研究センターに居たとしたらどうする?」

「!?!ツツまさか覆めー」

「なわけないだろうつ………それなら君は今頃口封じされてるさ」

咲耶に呆れ顔でバツサリ自分の発言を切られて、あつ………そうかと頷いた蓮は自身の浅慮さに恥ずかしそうに顔を赤くしながら頬を搔く。

蓮が落ち着いたのを見ると、咲耶は同じく注文したアイスコーヒーを軽くミルクだけかき混ぜて口に含み、周りの様子を確認しながら呟いた。

「周りからは不審に思われかねん、静かに話すぞ?」

「……………はい」

「フツ、そう肩を硬くするほどじゃなくていい。

ー簡単に言えば、私は君が少年の時、覆面に蹴り飛ばされるところにちょうど出くわしたー共通点はバットと男口調ぐらいだが…研究センターに来た時点で確認する必要はないだろう?」

「お姉さんも研究所に!?!」

「……………それなんだが、私も元男なんだ…」

「ええ!?!」

衝撃の事実蓮は口をあんどあけるが、咲耶も肩をすくめるしかない

現状解決方法がない以上諦めるしかないだろうと顔で語っていた。

「話を戻すぞ、…で私としては君が蹴り飛ばされる前に助けたかったが、丁度バットで返り討ちにあつていてな。

…普通銃を持った相手にバットだけで殴りかかるとか正気とは思えんが…………」

「いやゲームみたいにいけるかなって、…………マリルさんも普通に倒してたし」

「お前は何処の超能力少年だ……ッ!?…他に人がいたのか…

ーマリル?…マリル・フォン・ブラウンか…!?」

蓮から思わぬ所で出た情報に、静かに驚きを表す咲耶だったが、話を蓮に首で促し蓮もこくりと傾いて話し出す。

「うん、…俺もいきなり研究センターでマリルさんに会って、覆面もマリルさんが拳銃を奪ってささつと倒しちゃって、壁際に蹴飛ばしたというか」

「それは…手慣れてるな、本当に科学者か怪しいものだが…私も大学の関連で彼女の講義の補助人員程度に来る予定だったんでな」

「そうなのか?…あつ!いや、そうなんですか?」

「無理に敬語にしなくていい、改めて自己紹介だ、御守みかみ 咲耶さくや 21歳でこの付近の大学に通っていた」

「俺は坂井 蓮。新豊洲市に住んでる高校生かな…小さい時7年戦争で両親を無くしてから一人暮らしをしている」

「…そうか、辛いことを思い出させてすまない。まあ、私も同じ戦争で両親をなくしたかな」

ポンポンと優しく頭を撫でてくれる咲耶の姿に、蓮は年上の兄か姉がいたらこんな感じなのかなと心が温かくなった気がした。

「それで私の方だが、まあ……蓮に言つといてなんだが、私も覆面に殴りかかったんだ」
「ツ人のこと言えないじゃん!？」

「……うっ!……まあ、なんだかんだ二人までは倒したんだが」

「めちやつよ!？」

「そこまでは良かったんだが援軍の奴に、こうパァーンって胸撃ち抜かれてな。

……まあ、ミイラ取りがミイラになったつてわけだ。

そして出血多量から気づけば辺りは火の海、泣き叫ぶお前を最後に意識を失った。」

蓮はあの時の情景が思い浮かんだのか、顔を青くし口を手で抑える。それにいち早く気づいた咲耶は素早く駆け寄り背中を優しくさする。

「あくまであれは夢か現時点じゃ分からない……だからお前も研究センターに真相を確かめにきたんだらう?？」

咲耶はゆっくりと撫で、静かに問う。蓮も咲耶の落ち着いた聞き方と人の温もりに徐々に落ち着きを取り戻すとコクコクと首だけ少し縦に振った。

「実はあの時―「ニヤン♪」……そうなんだにやん♪……つてにやん?？」

「……………」

自然と猫の語尾をつける蓮に咲耶は言葉を失っていた、ただそれは、蓮の可愛さなどでもなく只々目の前の光景に丸くしていた。

「どうしたんだよ？ 咲耶さあ……うわっ!? なんだこいつ!?」
「にゃん♪」

咲耶の様子がおかしいことに気づいたのか辺りを見渡して、蓮はバツと自分の座っていた位置から大きく仰け反った。

そこに居たのは2頭身の人形というかマスコットのような猫である。もう漫画チツクなデフォルメをしていて愛くるしい様子だ、手の大きなドクロマーク爆弾を除けば……

「ツ蓮!!!」

「へっ?……わっ、「にゃん!!」ーああ!?!」

思考ではなく反射的にソファからテーブルに素早く飛び乗った咲耶は素早く蓮を軽く手で抱き寄せると空いた場所に向けて跳んだー

グシャリッ!

重い音ともに2頭身の爆弾を持ったネコーボム猫が振り下ろした爆弾で咲耶達の居たテーブルを粉々に粉碎した

「えっ!? ええ!?!」

「次から次に何なんだ!?!」

2人とも驚くが、素早く咲耶は椅子を蹴り上げ、窓側の方に浮いた椅子を蹴り込んだ。

ーガシャアアアーン

硝子特有の破砕音と共に蓮を抱えつつも、猫のように身を丸めて外側へと飛び出すツ
「ちよ、咲耶！硝子!？」

「馬鹿かお前は!?! 周りに人はいない!! さっきの生物が何かも分からんがな!?!」
「人が!?! ……嘘だ、さっきまで女子高生やPC弄った男の人だつてツツツ!?!」

咲耶は怒鳴りながらも蓮が怪我しないように細心の注意を払いながら、抱えたまま駆け出す。蓮は蓮でさん付けを忘れるほどに慌てて咲耶の言葉を否定するように指差すが、
「……無人だった

蓮はゾツとした……まだだ、世界で自分だけが取り残されるような感覚
そんな中ギユツと抱きしめる力を強くされ、急速的に意識を戻される。

無意識に視線を写すところらを気遣わしげにみる咲耶の顔が間近にあった。
(そうだ、今は咲耶さんがいるーもう『1人』じゃない)

「……大丈夫か?」

「うん、…大丈夫! ありがとうツ咲耶さん!」

「追っつけてきているみたいだ」

タンタンタンと小刻みにしかし軽快に街中を駆ける咲耶は呟く、2人して視線を向けるとズドドドと追いかけてくるボム猫が3匹いた。

(増えてるし……!!?)

2人は考えがシンクロしつつ、顔を見合わせるが対抗策などあるわけもない。

「ちい、キリがない！身体能力は正直いうと上がっている感じだが、正直勝てるかって言われると珍生物だし分からない」

「俺もこのバットぐらいだし……あんな化け猫……へ？なんかバット光ってんだけど!？」

「ハアツ!!これ以上イベントはいらんぞ!!早く捨てッ……」

ちい!!？」

蓮の発言にうんざりする咲耶だが、突如横の細道から現れた4匹目のボム猫に驚きながらもキュキュつとバツシユのように靴を鳴らしながら、サイドステップで咲耶は攻撃を回避する

ゴシャっ!ー突撃したボム猫は標識にあたるが、パイプがぐにやりと折れ曲がっただけボム猫は痛そうにしながらも損傷はあまり見受けられない。

そんな中蓮は熱に浮かされたかのようにバットの紋様に触れていた。

「れっ!?!(無警戒すぎる!?!いや無意識か!?!)」

「……………あ」

蓮がバットの紋様から手を離れた時、変化が起きていた

「ん、ようやく出てくれた!! 貴女が私を出してくれたんだね!」

「へ?.....女の子?」

「どうなって.....しまっ!?!」

いきなり明るいライトブルーの髪色でツインテールの女の子が出てきたのだ...2人が呆気に取りられていると油断していた咲耶が突撃してきたボム猫の突進を受け、電柱に激突する

「ツガハツ?!.....あぐう」

「咲耶あああああああ!!?!」

「マズっ!?!やばい状況じゃん!」

コプつと口から血が溢れ、脇腹の痛みで咲耶は顔を歪め、蓮は叫びをあげ近寄ろうとした。

しかしツインテールの女の子が咄嗟に手で静止をかけ、蓮は間にボム猫軍団が集合していることに気づいた

「ー追いつかれたツツ!!」

蓮は泣きそうだった、このままじゃ咲耶が死んでしまう。

折角自分を唯一知っている存在、兄のような、姉のような存在.....

「離してくれツツ!!俺は咲耶さんを助けないと!!」

「待って!!今言っても二の舞になるだけだよ!?

私力が力を貸すから!言う通りにして!!」

「…………ちか…ら?君は一体…………いや、頼む!咲耶さんを助けたいんだ『アニー!!』」
「ツツ!うん!いつくよー!その装備じゃ心細いし、ケンカ衣装用意したっげるんだからあー!」

——

(いいてえ

……………これ骨折れたか?)

はは、またかよ。覆面の次はブサ猫か?勘弁してくれよ…………)

薄れ行く視界、痛みに意識が飛びそうになりながら咲耶はガリツと抵抗するかのよう
に下唇を噛む、血の味がする、ズキズキと痛みと脇腹から下腹部にかけて燃えるような
熱さを感じる。

(れ…ん、逃げろ……………なんでバット構えてやがる

お前だけでも……………逃げ……………ろよツ)

まただ、と咲耶は自嘲しながら腹に触れる、ヌチャリと感触がする

―腹も衝撃で損傷している、内出血つてレベルじゃないなど何処か他人事のように思

う。

(なあ、何してんだよ御守 咲耶

……………今度こそ護るって決めてたじゃねーかよ

またツツ、またツツツ!!)

護れないのか、そんな言葉が脳裏に浮かぼうとした瞬間

『諦めないでください、マスター』

「ツツツツ!!」

その瞬間ガバツと上半身を勢いよく咲耶は起こした

「あ?……………なんで痛みが??」

「……………動かないでくださいマスター、まだ治癒は完治していません」

「!?!」

痛みを感じなくなってきたこと、青い膜に包まれていることに咲耶は呆然として
いると、突如降ってきた声に惹かれるように視線を向け、言葉を失った。

「ようやく……………漸く逢えましたねマスターツツ、…私はシズク……………貴方の声に応え参
上致しました!」

「……………」

金の紋様が刻まれた漆黒の修道女服に身を包み、黄金色に輝く糸のような腰までなび

く金髪と、燃える紅玉のような瞳の彼女は、とても綺麗だと咲耶は思った。

「きみ……は？……俺は生きてるのか」

「ええ、危ないところでしたが間に合いました！……マスター御命令を！

私は貴方の盾であり刃となりましょう」

雫の白い陶磁器のような手に触れるとクンッと軽く引き寄せられるように立ち上がる、それどころか

「これはー？（身体が軽い、傷が癒えたどころじゃない……さっきまででも男の時より身体能力が成長していたのに……力が漲っている、これなら……!!）」

「ッそうだ！蓮は!!」

「大丈夫ですよマスター♪」

ニコツと笑顔を浮かべたシズクが指差した方向を見ると横にフルスイングをしてゴム猫をホームランする蓮がいた!!

「なっ!?!」

「だりやあああああああ!!」（カキーン

「ギニャー!?!」

「一球入魂ツツスーパーアニーちゃんボオオール!!」（ビシユツ

「ニャゴ!?!」

驚く咲耶の目の前で、襲いかかるボム猫よりも素早く蓮はバットで吹き飛ばし、アニーちゃん？と自分の名前を呼称する少女は人外とも言える豪速球でボム猫をボールで場外まで持っていく

そして残されたように落ちてくる爆弾はシズクがサツと手を振り払う事で、右手から先端にペンデュラム付きの鎖が発生し、全てを搦めとるように回収し爆破する。

BOMB!!コーコミカルなアメコミのような音を立てたあと、辺りはさつきまでの戦闘が嘘のように静寂に包まれた。

「やった、大勝利！」

「うんうん♪いいスイングだったよ!!才能あるう！」

「戦闘終了、損傷なしーマスター、お疲れ様です♪」

「……………あつ、ああ……」

自分が起きた瞬間ピンチがあっさり終わり、シズクの声に生返事しか返せない咲耶に對して気づいたのか、蓮が勢いよく飛びついてくる。

「ツと!?……蓮？」

「……しゃくヤツツ、……ひぐつ……よかつた……よがつたよおおお」

「……………」

ボロボロと涙を流しながら、強く抱きついて泣き叫ぶ蓮に咲耶は心配かけたなと声を

かけ、そつと壊れ物を扱うようにそつと抱きしめ返し、このピンチを助けた謎の2人は暖かい眼差しで見守るのだった。

——暫くして、蓮も落ち着いて恥ずかしくアニーの後ろに隠れたところ、2人はアニー達から説明を聞いていた。

「……………は？魔女？」

「そうだよ？もう一度自己紹介！私はアニー・バース……………蓮達は特別なんだよ」

蓮は訳がわからないとばかりに、青いハート模様のあるファーコートをきたライトブルー色のツインテール少女アニーは八重歯を見せながら人差し指を立てた。

咲耶もそんなアニーの言葉に先程の出来事を思い返しながら、隣の女性に確認の為に尋ねた

「あー、うんシズク……………だったよな？」

「はい！マイマスター♪」

「あ、いや君みたいな可愛い子に言われるのは私も光栄だが、マスターはやめてくれないか

？」

「では……………？ 咲耶さん？」

「うっ！／＼／＼／＼／＼／」

あ、ああ……………それでいい／＼／＼／

流石にシズクみたいな大人びた同年代の雰囲気を感じさせる女性に話しかけられると余裕も崩れる咲耶だった。

「えと……………それで魔女って異質物研究の『魔女』だよな？……………実在したのか」

「仰る通りです、咲耶さん。私達は魔女と呼ばれる神秘の存在で異質とされますーそして此処も今や、現世とは隔離された異質の世界」

「……………異質……………つまり人がいないのはその境界線内にいる、又は取り込まれたからということか？」

情報をシズクから聞いて咲耶が整理していると、蓮が手を上げて疑問の声を上げた。

「じゃあさ、さっきの化け猫倒したじゃん？ なんで此処にまだいるんだ？ 出る場所があるのか」

「確かにな……………2人とも何k「その必要はございません」ツツ！」

「咲耶さんー！」

「えっ!?!」

いきなり聞こえた第三者の声にバツと咲耶は周りをいち早く見渡し、背後をかばうよ

うにシズクがすぐに構えて移動する、戦闘慣れしてなさそうな蓮とアニーはおろおろしながら周りをキョロキョロするばかりだ。

すると隠れる気がないのか、声が出たところに淡い光が舞い、そこから豪華な着物を着た濡羽色の髪に絢爛とした髪飾りをつけた女性が現れた。

「突然驚かせてすみません、人の子よ

私の名は月讀命、つくよみのみこと月夜見尊とも呼ばれますが——日本三大主神の一角です…」

「……………なっ?! ツクヨ……………ミ? あの日本神話の」

「か、神……………さまってええ? ええええええええ!!?」

「すっごい綺麗——!」

「アニーさん、そこじゃないかと……………」

三者三様というべきか、それぞれの感想が並ぶ中、ツクヨミは紅い瞳を細め、静かに話し出す。

「私が此処に現れたのはお告げの為」

「お告げ……………?」

年齢的にも代表して、咲耶が前に出て聞き返すと、ツクヨミは左様と頷く、
「私が訪れたのは主神の中で自由が効きやすい身だからです、人の子よ

——今のこの世界をどう思う?」

「ど、どうと言われてもな……」

「質問を変えよう……何があつた？」

「……おい、まさか……嘘だろ」

流石の咲耶も可能性に思い至り、顔を青褪める。

蓮達も、シズクを除いて不安そうな表情で咲耶とツクヨミを交互に見る。

「な、……なあ咲耶さん、一体どうしたんだよ」

「……蓮、私達は……いや俺達はある地獄の光景を見たよな」

「ツツ!?……咲耶さん、まさか」

「あれが現実起きた可能性が限りなく高い……」

「ま、待ってくれよ!?それなら俺達が今生きているこの世界は何なんだよ!」

「其処ですよ、人の子よ……そなたたちは生きている……」

否、……それは真実であろうか?……」

スウつと射抜くように細められるツクヨミの視線に蓮は腰をぬかしアニーはそんな蓮を心配そうに支え、咲耶も沈痛そうに黙る。シズクはただだんまりと咲耶に寄り添うだけだ。

そんなシズクにツクヨミはチラリと視線を定める

「そなたは何故落ち着いておる?……何か理由があるのであろう?」

「私は……………」

シズクはキュツと咲耶の手を両手で握りしめて、ツクヨミを真っ向から見返す。

「私には記憶がございませぬ、あるのはシズクという名前だけ……咲耶さんの強い呼聲に惹かれ、消えそうなのに熱く、眩く点滅する星に惹かれた魔女です。

私が必要ですとは咲耶さんを助けること、そのことに意味があると思っております—

！

「…………なるほど、定めとでも申すか。……………人の子よ、この世界は滅びた……………と言
えるかは分からぬのです」

「「え？（何？）」」

ツクヨミは黒い扇子をバツと広げ、軽く扇ぎ、虚空を見つめる。

「私は夜之神、

月が交差するのをずっと見届けてまいりました。しかし異質物なる物は私が産まれ
落とされる前から存在しております…」

「————」。

ツクヨミは眩き終えると、パチンと扇子を閉じ、咲耶達に先端を向け言霊を紡ぐかの
ように厳かに言った——

「人の子よ……………」

探しなさい……………此の虚構世界ノ真実ヲ

探しなさい……………此処ヲ此処足る存在を——

——絶望しようとも

——先が見えなくなろうとも

——避けてはなりません、潰えてはなりません

アア、人の子よ……愛しき子達よ、妾が照らしましょう

天照様が表を照らすならば

妾は暗路を照らして活路へと変えましょう

……………日ノ本の神々は動いております、私からの神託は以上ですが

また因果の果てに会うでしょう……………」

ザザツ、とツクヨミは影に消えるように姿が乱れていくと

やがて静寂から喧騒が舞い戻った……………」

都市部の工事音、車の走る音、活気ある人の声

いつもの日常風景だ

「……………虚構世界の真実、……………あの日、あの時ナニカが世界を変えた……………変わった」

「探さないと……此の世界で真実を知る俺達がッ!!」

雲一つない青い空、しかし何処か遠くを見つめるように2人は睨みつけるのだった
.....